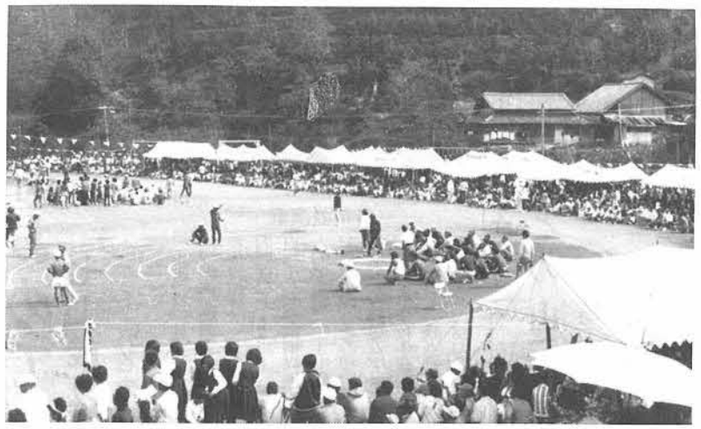
津奈木

発行所
津奈木公民館
芦北郡津奈木町
電話　（代表115番）
編集　編集委員会
印刷所　緒方印刷所
八代市通町
電話（八代）② 3117番

町民体育祭

出て喜び、見て喜ぶ



早くもテントの中は満員御礼

一家・部落・町のたのしいだんらん

義務感で出ていた町民体育祭が、今では、出ることを当り前と思い、出て楽しもうという町民体育祭になった。

昼食のときの、一家の部落のだんらんは見てもたのしい。一方店の前の子供の人だかり、昔のお宮の祭そのままであることを思い出す。

仮装行列のおもしろさ（出場＝千代・大泊・赤崎・平国あつまる会＝以上青年団、福浦・平国下合串一般ここの出て喜び、見て喜ぶ町民体育祭はやがて町は一家につながる。

○当日の成績、一位上下門、二位日添、三位平国下、四位中尾、五位福浦、六位染竹浜崎

○体育功労者　田川直喜・森下武明・佐々木末喜・丸山くみえ・井川みつる・下田きよの・山本つや子

○優秀選手　池崎泰子（津南中）　千々岩　繁（津南中）

○感謝状　磯見勝次（体育向上）　尚その他に※

裏でのにぎわい

津奈木にこんなにも！

ほこら巡り (7)

堀　二雄

内野の彦太夫祠、と思ったのは、山の神祠でした。彦太夫の墓がその祠の左側一歩の所にあります。道路工事の都度移されて、現在は三度目の墓です。足初移転の時は（若島氏宅前）頭の骨が出たと、古老達から聞きました。言伝えに彦太夫は、豊臣秀吉が島津征伐の折、豊臣方の密偵であったので薩摩の人から恨らまれて命をねらわれ、追わる身となり、逃れ逃れて、光明寺に僧んでいる所を、二人の武士に襲われた。とっさのことで彦太夫は、寺への迷惑を考え、津奈木太郎の山中にでも逃げ込むつもりであったが、外に飛び出したが、もう百米も行かぬうちに、追い込まれて斬られた。二人の刺客は近くの泉で返り血を洗い落し、刀も洗い清めて、立去ったという。天正十五年三月、豊臣秀吉は、大阪を発して、九州親征に向かった。その際、秀吉には、実業界、宗教界、海運界等の最高峰と見られ多くの人々が随行した。九州政策に貢献参画する為であった。

時の真宗本願寺第十一代の顕如上人は、武力的宗教家と言われた程で、織田信長の大軍と、大阪石山に戦って、一歩も退かなかったが、損害も多かった。然し秀吉は、上人を庇護し厚遇した。今の西本願寺の開祖となった顕如上人も、秀吉の九州政策、特にキリスト教追放後の宗教政策のこともあり、自身九州入りをしなくても、自分に代る大物を差向けたに違いないと思われる。蘇峰先生も、疑われる点もあるが前おきして、左の一節を記されている。上人は薩摩に下向し、獅子島の道場に在って、門弟と称して、多くの密偵を駆使したと。何れにしても、真宗は全僧を挙げて、秀吉に対するよりも、むしろ本願寺に対して忠誠であったろう。従って薩摩の人々は、真宗こそ薩摩に仇した、最高の諜報機関と見て、徹底的に真宗弾圧の挙に出た。

彦太夫も真宗一派の密偵として、追われる身となった。光明寺に身を寄せたのも、何かの縁であろう。隠密は身分を明かさず、死して屍を捨ることなし、という厳しい掟があったが、彦太夫と云う名を残し、草むらに、秋虫鳴きすだく貧しい墓ではいえ、部落の旧家山路家では、今以て毎月十五日は墓参されると云う。彦太夫祠すべし。

※▼町長表彰者次の通り

◎環境整備表彰者
浦上米喜、林　益雄、沢田　務
西川　清、岡本正男、山口　敦
山口　等、広瀬喆正

◎永年自治区長表彰
松永　博、諫山保澄
全自治区に功物寄贈者
上原松次

◎町官行造林功労者、山下宇作

◎美化清掃表彰者、石山慶子

赤崎小P・T・Aバレー大会

夏休みも終りに近い八月廿五日午前九時から午後四時まで、会員はもちろん、子ども、じいちゃんばあちゃんの声援をうけながら、本年度の部落対抗バレーボール大会が、珍好プレー続出のうちに終了した。

「会員相互の親睦をはかり、研修を深めて、子供の成長に寄与する」という本年度の目標達成のため、体育部では上村伸一部長を中心に年度計画が討議され、この大会の実現を見ることができた。

最初のうちは、地区役員も選手えらびに苦労が多かったようで、初めの間は練習する組も少なかったが、だんだん増え、いつの間にか、運動場は、一杯に変身、この熱意に佐々木緑会長が優勝トロフィーを寄贈しようというと、二位三位には、おれに出させてくれと諫山寅太郎氏が椅二基寄贈してもらうことになった。こうなると、練習は日増しに熱を加えた。

当日はトロフィー、椅の贈呈式につづき、上村部長の開会、諫山寅太郎氏の力強い宣誓、塩山教諭の審判上の注意、準備体操を終って、いよいよプレー開始、熱戦の末、次のとおりの成績となった。

優勝　日当上
二位　赤尾島
三位　日添下

なお参加チームは、日添上下、日当上下、塩屋、赤尾島の六組。

出過ぎず引き込まず

赤崎婦人会長　尾花ミズノ

会長就任して四年目になりましたが、今さらながら何も出来ないことを反省して、会員の皆様にすまない気持でいっぱいです。

赤崎校区は会員数二百余人、良き先輩会長によって育てられ、少しずつですが部落のお役に立ちたいと励んでおります。その一つとして結婚式、追善など各家庭でやっておりました行事を婦人会の方に引受けさせていただき、出来るだけ無駄のない、見栄を張らないことを主旨として行っております。

今年からは、引出物もなまでは菓子と記念品の二本立であったのをどちらか一本にしてはと、幹部集会で話し合い、部落の方方の御協力を願って、今日まで全部実行してきました。一人前としては約千円位の準しかありませんが、年間会館の方では五十件を越え、一回の人数は五十人以上ですからこれを年間に見ると約二百五十万円のお金が節約されることになります。

今日のように日増しに値上りする時世です。少しでも生かしたお金の使い方を考えるのも会としての務めではないでしょうか。

会の活動は広いのに、働く婦人の多い今日は集会も思うにまかせません。一人一人があらゆる機会を利用し、子供の教育、生活の安定、健康管理等に役立ててほしいと思います。

これからも部落の方方に助けられ良く勉強しておられます老友会を見習い、出過ぎず引き込まず会員と共に歩いていきたいと願っております。

わが青春の一頁

第二回 九州青年の船乗船記

事務局長　野　崎　憲　章

「香港」に別れを告げ、我々の乗った「にっぽん丸」は、第二の寄港地である「フィリピン」へ。

二日間の船旅の後、小雨降るマニラ港に降り立った我々を迎えてくれたのは、フィリピン女性の民族舞踊の舞台にかけ上がり、踊り子達といっしょに踊りだすというハプニングのあったスローレストラン、また、第一夜のフィリピン青年との船上交歓会。

だが、フィリピンでの最大のハイライトはやはり、ホームビジットであったろう。

男女五人一組ぐらいの割合で、それぞれ、各家庭を訪問するわけだが訪問先の出迎えを受ける団員達の心細そうな後ろ姿、私もその一人である。何しろ英語が皆目だめで「話しが通じるだろうか」という心配がさきにでるものだから。でも帰りの皆の嬉々とした様子からして、その心配は無用だった。私も実に楽しく歓談してきた。（もちろん、ほとんどが、身ぶり、手ぶりに熊本弁を入れてであったが）

そして、そいかけてくれる「サンバギター」という国花で作った首かざりと、軍楽隊による歓迎の音楽であった。

陽気で愉快なフィリピンの人達の心温まる出迎えの中、いよいよ現地活動の第一歩を踏み出した。サント・トーマス大学での交歓ッパラボンシテ

ホームビジットで訪問したサントス家の人達と

フィリピン村

でも、そういう国情でありながらも若者達の目の中には、暗いかげは微塵もなく、あくまでも陽気で楽天的で、そして、希望にもえた輝きが印象的であった。

続く

❖金言名言❖

名言は人生に対して不思議な力をもつ。
ある時は人を教え導き、ある時は人を励まし慰める。

肥満夢の枕

これも中国のお話です。

青、々、支那に履生という少年がいました。ある日肥城市で、道士さんという爺さんにあい、ため息をついて困しい身の上話をしますと、爺さんが、嚢中から枕を取り出し、

「これを枕にして休んでごらん、栄耀栄華思いのままになるから」

と言いました。

言われるままにしますと、すぐ眠ってしまいました。そして、いつのまにか、清河の崔氏の女と結婚し、進士という位につき、三十年間、国の内外で大活躍するという、比類ない栄華の夢をみました。大きな欠伸をして目をきましてみると、眠る前に、爺さんが、黄粱を炊いていましたが、まだそれが出来上っていませんでした。

人間一生の栄枯盛衰は、一場の夢にすぎないことのたとえですが、思えば、彼の有名な織田信長は、常に、

「人間五十年、化転ノウチニ較ブレバ、夢幻ノ如クナリ」

と、よく謡曲の一節を口ずさんでいたということですね。

（教育長）

長寿おめでとう

七十歳以上に記念品

敬老の日の多彩な行事

青年の演劇

本町では、九月十五日敬老の日に、恒例の敬老会を、津奈木小学校体育館外、三会場で開催、本町内居住の七十才以上の老人の方五百八十七名、結婚以来五十五年以上の御夫婦（二十七組）等招待、記念品を贈りその功を讃え、長寿を祈念し、御慰安申し上げた。

津奈木小学校体育館では、津奈木小学校区の該当者約四百名の参集、婦人会の協力を得て十一時開会、お祝品等の贈呈のあと、六車町長から、世界には百七十才以上の長寿者がいるのを思えば、七十、八十は人生の半ばでしかない。気を若く持って長生きして下さいという意味の挨拶があり、田中県会議員、川崎町議会議長からそれぞれ祝辞があった。式後は今日の日のために、練習に練習を重ねて練り上げた、町の青年団のすばらしい演芸や浜崎部落の見事な唐節踊り等の発表があり、町を挙げての敬老の一時に、参会の老人の方達も、時のたつのも忘れ、楽しい一日を過ごされた。

赤崎地区

平国地区

赤崎地区

赤崎校区では午後一時から、赤崎校区の婦人会の方達の協力を得て、赤崎会館において開催、約百五十名の出席があった。ここでも、津奈木町青年団の演芸に、老人達も大喜び、名残を惜しみつつ四時無事終了した。

平国地区

平国校区でも、婦人会の協力を得て、午後一時から平国公民館において、約百名の出席者のもとに開会。ここでは青年団の演芸の外に、小学校の劇の発表があった。子供らしい中にも、一生懸命な演技に、孫達の成長を喜ぶかのように、老人達も一心に見入っておられた。

福浦地区

福浦は七十才以上は十二名。福浦公民館に、一名の欠席もなく出席、ここでも婦人会員総出で協力、定刻一時半に開会。ここでもこの日のため、夜毎猛練習を重ねられた婦人会のいろ〳〵な踊の披露があった。素人ばなれしたその演技に、うっとりと見とれられる老友の姿は、楽しき一ぱい。

福浦地区

郷土出身者紹介

ふるさとの山と海

野崎　次雄

略歴

明治四十四年十一月　野崎喜太郎三男として平国に生れる。昭和八年三月　内務省下関土木出張所（現在の建設省九州地方建設局）に就職。熊本国道補修出張所長、宮崎国道工務課長、関門国道（トンネル）工務課長、九州地方建設局、建設専門官、工事検査官、道路管理課長、佐賀国道工事々務所長等を歴任

現在、橋梁塗装株式会社、常務取締役（九州地区担当）

故郷を出まして既に四十数年になりますが、故郷の自然は忘れることはできません。私たちの世代は最も厳しい頃で戦争に明け暮れていました。敗戦の色濃い頃はB29の爆撃下で、そして戦後のきびしい時代でも、ふるさとの海や山を思い浮べながら過ごした事を思い出します。時折津奈木を通過します度に、長半岩の上にひるがえる日の丸の国旗を車窓から眺め心を新たにしたものであります。

建設省にいました頃の仕事は九州一円であり、其の頃鍋ヶ崎の突端でトラックが海に飛びこむ事故があると聞きましたので、当時のとしい資材と予算を集めて駒止めをつくり、山の方は切り広げて道幅を広めたものであります。

それから国道三号線の改良工事で、路線が決定しましたとき、私は九州地方建設局にいましたので「公民館を小学校の雨天体操場に使っている」と役場の人から聞きまして「横断歩道橋をつくること、小学校の入口に歩道を設置すること」を条件として、予算を確保したのであります。

さて人間年を重ねますと益々故郷は頭にこびりついて離れません。

「公民館報」を初めて拝見しまして、これからの津奈木を背負って立つ若い世代の人たちが、いろいろと活躍しておられる様子を知りまして、大変嬉しく力強く感じました。

そして私は若い人たちに、政争もない豊かで平和な町づくりをお願いしてやまない次第です。

終り

芦北地区童話発表会

津奈木地区は二位と三位に入賞

芦北水俣市公共図書館主催の昭和四十九年度水俣芦北地区童話発表会は、八月二十六日午前九時半から、水俣市公会堂で、芦北水俣各小学校から選抜された十九名が参加して行われたが、津奈木町からは、予選して、津奈木小学校二年元村公子さん、平国小四年浜田良彦君、津奈木小六年山田裕子さんの三名出場、みな見事な発表振りであった。

郷土史あれこれ

高山彦九郎津奈木滞在日記（4）

岡松　壮

古川橋よりえぼうし岩等を望む（カッコ内は筆者の注）

深水氏へ帰りて寿格（このの玄門）案内にて赤尾島に渡ぶ。川を越えて浜村に為朝神社あり。

かぶと岩・えぼうし岩・大門岩など天岩あり。

山によりて西北にゆく。男島とて左に近く見ゆ。なおゆきて左に湯之児島とて小島あり。海中温泉ありという。

左百羅が墓あり、その下に荒滝五太夫墓、山をおりて赤崎村西道仙のところによる。（申すまでもなく旧道である）茶を頂く草餅などを出す。

西四五丁岩石を渡り赤尾島へいたる。登りて一丁に足らず、弁天の石祠あり。

五里余天草きかえ島あり。すべてときえと号する地なり。きかえ島をほ下とときえ号す。

西の方獅子島八里ばかり、薩摩の内なり。同薩摩の内長島も西にあたりて十二三里なり。

獅子島には幣串（へぐし）という地おのおの七ヵ所、恵比寿をまつる。上古、嫩島の神きたり給い、ここにましまさんとせしところ、島の里数七里に三合足らぬとて、安云の国宮島に宮居し給けると伝う。

躍進する青年団

団長　林田　和幸

第十六回熊本県総合青年祭が、八月二四～二五日、菊池市において開催され、わが町連合青年団女子バレー部は、堂々第三位という輝かしい成績を残した。

郡総合青年祭優勝後行われた郡民体育祭でも更に県体出場権を獲得した。

青年祭においては、第一試合は宇土郡、第二試合阿蘇郡と、共にストレート勝利、いよいよベスト8回志の戦いが二日目早朝より始まった。相手は八代市総合青年祭において四十二町村のチームに勝ち抜き、八代市の代表となった植柳町チームである。試合展開は接戦に接戦、さすがに強豪チーム、第一セットを落したが、その第2セットは各会場から応援団が駆けつけ、選手と一体となって声援合戦もさらに激化、一点満点の試合は第二セットと同じであった。ねばりのすえ一対一の同点とし、三セットでは本領を発揮し準決勝進出ができた。

もうここまでくると、全国大会が目標になるが、県のAランクチーム強豪熊本市を準々決勝で敗退させた。次に八代郡チームとの対戦では、応援合戦も半狂乱状態で、試合は一進一退、体育館内の誰もが、ただ一つの白球を追っている。結局二セット共、少差で八代郡が勝利を収めたのだが、みな口々ろえて、優勝戦より白熱した試合だったと話していた。

ここまでくるのに、遠くは平国から練習に参加した団員、送り迎え練習相手を勤めた男子団員、毎晩のように、準入れした各団員、それに練習過程で精神的に苦しい時、みなのチームワークで別点であった。

まして奨励賞三位、想うに、このような、つ、つを解決し自己形成へ結びつけるのが青年団のすばらしさであろう。最後に関係団員の両親が深くこのようにご理解頂きましたことに厚く御礼申し上げます。今後共団活動に両一層のご支援を重ねてお願い致します。

公民館裏の草とり

奉仕に感謝

9月22日午前9時より、中央公民館前に、50数名の青年団員が集まり、役場、公民館周辺の除草、樹木の整枝、不良品の焼却等に加えて、阿蘇宮側の石垣の除草、川の中のゴミ等も拾集、昼からは青年教室と津奈木小学校体育館周辺の除草と、古中尾部落の山崎直次郎様から頂いたフヨウの樹二十本を、正面玄関側に植樹してもらった。

――◇――

さらに、昨年植樹したムクゲ樹なども施肥等と、青年団の美化その他の奉仕活動に各関係者を始め町民は感謝している。青年団がかねて心身共に正しく強健に成長し、明るい町づくりに貢献しているのに深く頭が下がる。この美しい、たのしい青年団に、まだ加入していない青年は、入団して何かを発見されたらいかがでしょうか。

公民館主事　伊藤秀志

青年団事業報告及び予定事業

広報部長　村上　広（支部事業は別）

8月24～25日　県総合青年祭
9月15日　敬老いろう会
9月22日　町内美化奉仕
9月28～29日　県民体育祭
10月5日　町女子部研修会
10月10日　町民体育祭協力
10月13日　郡女子部研修会
10月27日　自然をみなおそう会のハイキング大会
11月上旬　町問題研究集会
11月16～17日　青年団体幹部研修
11月中旬　夜間行軍
11月下旬　経済学習会
12月上旬　支部対抗スポーツ大会
12月中旬　リーダー研修会
12月下旬　さようなら74の集い

復刻

六車茂一郎著

津奈木郷土誌

価格予定二五〇〇円
申込所（津奈木町史談会事務所（公民館内）

肥後狂句

堀　双岳選（順不同）

逆戻り、踏み間違えた姿婆の道
から元気、わゞく云うだけはか
どらん　矢太郎

逆戻り、あいた忘れた免許証
逆戻り、馬鹿ねじ一なってもう
とる
から元気、ぎっつり腰じて戻りし
た　双岳

逆戻り、ミニ[illegible]トがよかった
たて[illegible]
逆戻り、禁酒[illegible]ばかり
から元気、ミ[illegible]ばかが後が世
話　拙者

から元気、[illegible]
から元気、な[illegible]石からこなき
る[illegible]　貞夫

次郎
知らん、横から、
四句以内、十月末[illegible]公民館へ。

会員募集について

肥後狂句会員募集中、十月末迄。老若男女を問わず。殊に初歩の人歓迎。

古いものほど尊い

史談会発足

津奈木の文化財が、家の箱の中にあるいは地中にうずまっているものを見つけ出して調査研究し、保存をはかるとともに、それを本町の文化発展のために役立たせる史談会が、去る八月廿日に成立しました。

鳥居　保氏、中尾の自動車整備工場）の古文書は歴史研究専門家の珍重するものであります。旧家には必ずそんなものがあると思います。

古いものと見ればやたらと天事がる史談会員です。

どうぞ、古いほど価値あるものですから、ご天事にせられ、史談会のためにも利用させてくださるようお願いいたします。

なお、会員には、いつでも、どなたでも加入ができます。特に旧家の方におすすめいたします。お宅の古文書その他を、あなたと共に会員もよってかかって調査研究させていただきます。わからないところがあれば、その道の専門家に見てもらいます。

役員は次の通りになりました。

会長　岡松・壮
副会長　永松登弥　堀　二雄
幹事　斉藤　治　緒方孝行
千々岩英昭　岡本秋徳
林田義人　西　保馬
監事　志崎鳥未　緒方　洋
会計　佐々木　緑
書記　野田嘉子

主張

大明神拝殿造営促進要望

内野　斉藤　治

長弊岩が町のほぼ中央に峨峨たる雄姿で聳え、一級国道沿いであり、国鉄鹿児島本線の列車の車窓からほぼ全面眺望出来る。

この名岩の麓に町社として遠い祖先から信仰の中心であり、町民の守護神として尊崇した鎮守の神、大明神様の神殿の前面に、物置とも、仮小屋ともつかず、風でも吹けば飛びそうな建物のあることは万人の気付くものと考えられる。

我が町にも普通一般に神前結婚式場として、挙式出来る拝殿としての建物があれば、披露宴会場は公民館が出来るし、神主は蟻川氏ご健在であると承るので、神前結婚する人の殆んどが、水俣の八幡神社、佐敷の諏訪神社にお世話になる者もなくなるものと考えられる。

神前結婚ばかりでなく、故郷を後に旅立つ人、入学進学就職起業といった、人間社会に於て未来の希望を抱き、祖先から受け継いだ真面目で根気強い、町民性を活用し、次元が高く無限に向上する智能レベルの厳しい社会に町民の根性を充分生かし、如何なる強敵にも臆せず、いるまず勝つことの出来る根性を発揮する硬い決意を誓う神域であり、無量感こうたれる清純な浄想理念の境地たらしむる拝殿の造営を即刻進める具体的施策を町民の皆様に申し上げたいものである。

大明神拝殿の造営については、関心のある方も多いものと察せられるが、今日まで実現されない裏には、私どもが関知しない問題もあるとも想像されるが、私ども町民に限らず、風致上又は現地の環境調和の上からも、知ると知らざるとに拘らず異様に感ずる現況なるが故に、過去を一切払拭し、遠い祖先から引継いだ神信仰として又は人間形成の精神的根源としての神域を子々孫々に伝えたい希望から一稿を投ずる者であることをご寛容願いたい。